

## 陸修会設立と偕行社

柴田 幹雄 陸自75

本年4月27日、陸自幹部退官者の会、略称「陸自RO会」の設立総会があり、筆者も参加し、主旨賛同して会員となりました。その総会において「陸自RO会」の正式名称が「陸修会」と決まりました。

陸自RO会については聞いたことがあるという人もいると思いますが、ほとんどの会員の皆様はご存じないのではないのでしょうか、偕行社と同様の

趣旨を掲げる同会について、偕行社との関係も含め両組織の一会員の立場で紹介したいと思い、筆を執りました。

陸修会については設立趣意書に設立の背景から目指すところまでが記述してありますので、多少長くなりますが全文を掲載します。

「陸自幹部退官者の会（陸自RO会）」設立趣意書

警察予備隊創設から約70年、そして東西冷戦が終焉して約30年が経過した。この間、陸上自衛隊は、我が国の平和と独立を守り抜くため日々錬磨に励むとともに、その当時の我が国を取り巻く国内外の防衛環境に的確な対応をし、我が国の防衛に大きな役割を果たしてきた。

そして、現下の我が国の防衛を取り巻く環境は、中国、北朝鮮、ロシアなどの周辺諸国の情勢やいつ発生するか予断を許さない大規模地震をはじめとする大規模な自然災害、さらには少子化時代における隊員確保など、これまでになく一層厳しい状況となっている。また、一国のみで我が国の防衛を遂行することが困難な時代にあつては、米軍をはじめ

め諸外国の軍人との安全保障対話防衛交流もより重要性を増している。

今後陸上自衛隊が、このような状況に引き続き的確に対応し、その役割を果たし続けるためには、陸上自衛隊退官者もこれまで以上に、退官者としての役割を果たすべき時代が到来していると考ええる。

一方、現状において、自衛隊の活動を支援する退職者の組織には、自衛隊退職者からなる「公益社団法人隊友会」、海上自衛隊の退官者からなる「公益財団法人水交会」、航空自衛隊の退官者からなる任意団体「つばさ会」があるものの、陸上自衛隊の退官者のみをもって組織する全国的な会は、存在していない。

そもそも、日本でも有数の規模を保持し、かつ我が国の防衛という極めて重要な任務を遂行する陸上自衛隊という組織に退官者組織がないこと自体が不自然であり、加えて現下の状況を踏まえると、陸上自衛隊の退官者が、組織的に陸上自衛隊を支援すべき時代が到来していると言える。この際、統合運用の時代にあつて行動中の部隊等への全般的な激

励・支援については、「隊友会」を中心として既に行われていることを踏まえた場合、陸上自衛隊の退官者組織として果たすべき役割とは、陸上自衛隊のことをよく知る幹部退官者が一丸となって現職幹部自衛官への協力・支援を行い、もって陸上自衛隊の発展に寄与することと考える。

また、諸外国との更なる連携や防衛交流の強化を考えれば、幹部自衛官退官者にあつても、現役軍人と現役自衛官の交流と同じ様に、諸外国の退役将校との交流を深めて現役を支援することは、その必要性を増している。

さらに、現在迎えている「人生百年時代」にあつて、本組織が、会員相互の研鑽の場を提供することにより、幹部退官者が生き活きとして活動を行うことは、現役幹部の目指すべき魅力的な指標になるものと考えられる。

以上のことを踏まえ、今回、「陸上自衛隊幹部退官者の会（仮称）「陸自RO会：Retired Officersの会）」を設立するものである。なお、本会の効率的かつ常統的な運営のため、既に一部の陸上自衛隊幹部退官者が、

入会している「公益財団法人偕行社」  
との合同を目指す。

令和4年4月27日

陸上自衛隊幹部退官者の会

設立準備委員会

総会ではこの趣意書と補足説明として、会の性格なども発表され、最後に正式名称がいくつかの候補の中から選ばれ「陸修会」が正式名称となりました。以下陸修会と記述します。

陸修会の目的は以下のように書かれています。

本会は、陸上自衛隊、特に幹部自衛官を通じての必要な協力及び支援、陸上自衛隊殉職隊員等の慰霊顕彰等を行うとともに防衛基盤の強化拡充を図るなど、陸上自衛隊の発展に寄与し、併せて会員相互の研鑽及び親睦を図ることを目的とする。

また事業としては、陸上自衛隊への協力及び支援、陸上防衛力に関する調査・研究と提言、陸自殉職隊員の慰霊顕彰及び遺族援護の協力、戦没者の慰霊顕彰、国内外の関係団体と友好親善・協力、刊行物の発行及

び講演会や研修、会員相互の研鑽・親睦等が挙げられています。

この会の特色としては、原則として陸上自衛隊を退職したすべての幹部を会員とするとしていることです。そして会員に対して、会費納入などの義務規定を設けず、有志会員の寄付金によって会を運営していくところでしょう。これは例えばある高校を卒業すれば会費納入の有無にかかわらずその学校の卒業生であり、OB/OG会のメンバーであるというような認識であろうかと思えます。

さて、こうして陸修会のことについて見てきますと、偕行社の目的や事業と重なるところが大変大きいと言えます。偕行社は最近、定款も改正して陸上自衛隊の協力・支援を事業の大きな柱の一つに据え、陸上自衛隊の応援団であるとの認識を強く持っています。しかしながら現職自

衛官の中における偕行社の認知度はまだまだの感があり、新規会員募集もなかなか思うに任せません。一方陸修会は、設立準備段階から陸自の協力・支援を目的として陸幕や隊友会などと調整しつつその組織

化を図ってきました。今般陸修会として発足し、退職した陸自幹部全員を包含する組織になったわけです。即ち陸自幹部退職者による陸自への協力・支援組織としての旗を設立時から掲げているわけです。陸修会の設立趣意書の最後の部分に、「なお、本会の効率的かつ常統的な運営のため、既に一部の陸上自衛隊幹部退職者が、入会している『公益財団法人偕行社』との合同を目指す」との記述があります。

偕行社は、英霊の慰霊顕彰、遺族支援、安全保障研究、政策提言そして陸上自衛隊への協力・支援などの事業の実施と組織運営の実績をもち、社屋をはじめとする資産を有しています。一方、陸自協力支援をする陸自退職幹部の会という旗を持つ陸修会が首尾よく合同できれば、まさに実も名もある陸自協力支援の組織になります。

日本陸軍から生まれた偕行社が陸自支援組織になじむのかといった声はあるかと思えます。

「自分たちは天皇陛下の軍隊にいたんだ、自衛隊とは違う」という従前会員もいましたし、「自衛隊は新国

軍となるのだから旧軍とは違う」という自衛隊の先輩もいました。しかし同じ陸上における戦いを遂行して国益、主権を守る組織として根本は共通しています。また事の良し悪しは別として陸上自衛隊は日本陸軍の伝統、戦術、訓練要領などを多くの自衛官が自覚しないままに受け継いでいます。例えば米軍顧問団がいたころは小銃射撃も最大発射速度で撃つ訓練をしていたそうですが顧問団がいなくなればまた4秒に一発、暗夜に霜が降ることしばかりになりました。戦術でも相対戦闘力が3倍もあれば躊躇なく攻撃を採用します。

一方圧倒的戦力差で突破することはなくとにかく包囲を好むこと、攻撃の最終段階は何の疑問もなく3分・2分・3分を合言葉？に着剣して銃剣突撃をします。この敢闘精神はまさに日本陸軍譲りです。また日米共同演習などで感じる米軍の自衛隊に対するある種の敬意は、現自衛隊

の部隊、隊員の精強性に対してのところは当然ですが、やはり大東亜戦争での陸・海軍の奮闘、敢闘へのものもあり、自衛隊が陸海軍のレジェンドを受け継いでいることもあるのではと思います。偕行社は、現在は

元自会員により運営されている組織でありますから、日本陸軍の栄光と伝統を継承しつつ自衛隊の協力支援団体として将来も発展していくことに何の疑問も無いものと思えます。それに憲法改正がなされ、自衛隊が国防軍になれば陸上自衛隊は陸上国防軍、略して陸軍になりますし……。

少し横道にそれたようです。話を戻します。陸修会は当然に全国組織になると思いますがその全貌はまだ見えていません。偕行社は全国に会員がいますが、各県等にそれぞれ偕行会・偕行社が存在します。現在は同趣旨を掲げる並列した組織で協力関係にあるという認識ですが、各地偕行会等との関係をどう整理するのかも考えねばならないでしょう。また陸修会と「合同」と言っています。が、どのような形で合同するのか、その際の会の名称はどうなるのかなど、分からないことは一杯あります。が、一会員として偕行社・偕行会の名称はそのまま残ることを希望します。

丁寧な議論と情報発信で会員の皆様が納得できる形で将来の発展ができていくことを期待しています。